

女しあわせ探

(14)

1972(9), 3, 7.

「夫が倒れた日は、朝から雨がやみ出た。雨は激しく、朝の、青雲の青も、真実子(真実子)は、更埴消防本部救助隊員だ。夫の病室で、当時、夫が倒れたのは、一九八九

年七月二十四日の午前十時前、青雲の青も、真実子(真実子)は、更埴消防本部救助隊員だ。夫の病室で、当時、夫が倒れたのは、一九八九

過労死—妻が書くカルテ

救助隊員の夫訓練中に

の終焉に終わった。

けなげな、救助隊のサインの旗、ひびく救急隊、呼吸停止の患者を、呼吸器の叫び声が響く、担架から手がなかりと振れ下がり、何の反応もなく、横たわっている患者、付き添いの看護婦から「あなたの旦那さん、倒れたよ」と言われた時、真実子は、頭を打ち、うがけない絶望感に襲われた。

「急性心不全」、それが医師が診断を下した夫の死因だった。救助隊員としての訓練に

「急性心不全」、それが医師が診断を下した夫の死因だった。救助隊員としての訓練に

加え、日々から体を鍛え上げていた真実子は、真実子は、倒れたのは、二十四時間勤務の夜勤明け、非常勤だったにもかかわらず、消防救助技術関係者大会への出場を控え、救助隊員に参加、本格的な訓練を始める前のランニング中の出来事だった。

「公務による過労死の死因」と、真実子も高の肉親も疑わなかった。死から二カ月後、地方公務員及消防関係者連合会に公務員死認定を請求した。

「公務による過労死の死因」と、真実子も高の肉親も疑わなかった。死から二カ月後、地方公務員及消防関係者連合会に公務員死認定を請求した。

「公務による過労死の死因」と、真実子も高の肉親も疑わなかった。死から二カ月後、地方公務員及消防関係者連合会に公務員死認定を請求した。

「公務による過労死の死因」と、真実子も高の肉親も疑わなかった。死から二カ月後、地方公務員及消防関係者連合会に公務員死認定を請求した。

「公務による過労死の死因」と、真実子も高の肉親も疑わなかった。死から二カ月後、地方公務員及消防関係者連合会に公務員死認定を請求した。

「公務による過労死の死因」と、真実子も高の肉親も疑わなかった。死から二カ月後、地方公務員及消防関係者連合会に公務員死認定を請求した。

「公務による過労死の死因」と、真実子も高の肉親も疑わなかった。死から二カ月後、地方公務員及消防関係者連合会に公務員死認定を請求した。

「公務による過労死の死因」と、真実子も高の肉親も疑わなかった。死から二カ月後、地方公務員及消防関係者連合会に公務員死認定を請求した。

「公務による過労死の死因」と、真実子も高の肉親も疑わなかった。死から二カ月後、地方公務員及消防関係者連合会に公務員死認定を請求した。

「公務による過労死の死因」と、真実子も高の肉親も疑わなかった。死から二カ月後、地方公務員及消防関係者連合会に公務員死認定を請求した。



(本文の内容とは関係ありません)

ショット92 鍛える

真実子には、夫が倒れた日から、倒れた前日の約三カ月間は、大変だった。通常勤務(二十四時間)に大会出場のための訓練(四時間)が加わり、一日交代の二十八時間勤務は、はじめての経験。しかも、六月三十日には消防救助技術関係者大会が行われたばかり。休む間もなく、目前に迫った関東大会出場に向け

「公務による過労死の死因」と、真実子も高の肉親も疑わなかった。死から二カ月後、地方公務員及消防関係者連合会に公務員死認定を請求した。

「公務による過労死の死因」と、真実子も高の肉親も疑わなかった。死から二カ月後、地方公務員及消防関係者連合会に公務員死認定を請求した。

「公務による過労死の死因」と、真実子も高の肉親も疑わなかった。死から二カ月後、地方公務員及消防関係者連合会に公務員死認定を請求した。

「公務による過労死の死因」と、真実子も高の肉親も疑わなかった。死から二カ月後、地方公務員及消防関係者連合会に公務員死認定を請求した。

「公務による過労死の死因」と、真実子も高の肉親も疑わなかった。死から二カ月後、地方公務員及消防関係者連合会に公務員死認定を請求した。

「公務による過労死の死因」と、真実子も高の肉親も疑わなかった。死から二カ月後、地方公務員及消防関係者連合会に公務員死認定を請求した。

女しあわせ探し

(15)

1992(2), 3, 8,

い何だったのだろうか。

夫の健康を害めて、自分は意外に知らぬ間に多量にたばこを吸い、真理子はいたたまれず、懸命に職場での夫の足跡を追い求めた。

そして、倒れかけた明多の同僚隊員がいつもと違う清治の姿を自撃していることを発見した。

消防本部救助隊のチームリーダーだった夫の清治は、当時まだ一歩を踏み出したばかりの真理子の香取を相手に、更なる山岳救助。救う側の職業の立場から、救急車で運ばれての死を遂げた。残された真理子が救いを求めた公務員申請では、夫の死が「公務外」の

家庭

性心不全で倒れるまで、疲労を蓄積させ、死に至ったものはいった

過労死—妻が書くカルテ

(2)

“落とし穴”タイプA行動



い出した。

「タイプA行動」、清治の足跡を追う過程で真理子

は、依頼した弁護士から耳慣れない医学用語を聞かされた。

「休むと罪悪感・不安感に陥られる」「競争心も自信も強い」「がむしゃらに猛進する」「そんな心理的・身体的特徴があるとい



ぞ。三十二歳になった夫の口癖だった。「消防救助技術大会」で獲得した賞状の数々を見て、若い消防隊員の成長を賞びながら、対抗心を燃やしていた。競争心も一層強かった。

「朝起きてからも、ランニングや筋力トレーニングを欠かさず、生活のすべてが救助訓練に直結してしました。責任感の強さと負けん気の強さが、まさか葬目に出るなんて！」

真理子は、公務に専ら邁進した夫が今となっては恨めしい気持ちだ。

真理子は胃腸病として、食生活を中心とする健康管理には細心の注意を払っていた。だが、そうした必要の努力を怠ったところから、働き盛りが引き込まれていった。思い切れない中で、「タイプA行動」と「急性心不全の要因」の接点が見え始めた。

真理子の代理人を務める和田潤一顧問弁護士(長野市)は、こんな見解を示す。「消防救助隊員という使命感の強い公務員がタイプA行動と密着に結びつくと、それによって生じた情動ストレスが症状顕性化をもたらして、急性心不全を発症させる原因になったと考えられる」と。

地方公務員災害補償基金連合会が調査を委託した「タイプA行動」と公務員、真理子にどういった関係があるのか、この調査結果を明らかにして、急性心不全を発症させる原因になったと考えられる」と。

「公務に専ら邁進して、職死した夫の名前と、私たちが家庭の生活を守るためにも健康を維持したい。同じ境遇にある消防隊員の仲間や、同じ働き方をしていく夫を想えるすべての妻の幸せもかかっているのですから」。真理子の切実な願いだ。

「タイプA行動」の概念は、アメリカの心臓病学者M・フリードマンとR・ローゼンマンが一九五九年、高血圧心疾患のリスクファクター(危険因子)として提唱した概念。別冊「タイプAの人の高血圧心疾患の発症率は、そうでない人(タイプB)に比べて、男性が一・四、女性が一・〇三、〇倍である」と報告されている。

ストレスを蓄積させて、清治さん急死心不全になりやすい性質にしたのも「タイプA行動」、体調不十分なのに訓練へと駆り立てたのも「タイプA行動」でしょう。そして行動を止んだのは、仕事なんです」といふ。

ストレス発症研究委員会に加わる石渡さんは「高度経済成長を支え、仕事一色だった中高年齢層に、こうしたタイプの人が多い」と指摘する。

ショット'92

鍛える

「タイプA行動」。

真理子は聞きなれた。清治が「タイプA行動」を特徴としていた。一時間の切迫感「タイプA行動」も、消防救助隊員が「タイプA行動」を特徴としていた。真理子は、このタイプA行動に結びついていられる気がした。

名古屋大学医学部研究員の石原伸徳氏は「同じ境遇

「タイプA行動」の概念は、アメリカの心臓病学者M・フリードマンとR・ローゼンマンが一九五九年、高血圧心疾患のリスクファクター(危険因子)として提唱した概念。別冊「タイプAの人の高血圧心疾患の発症率は、そうでない人(タイプB)に比べて、男性が一・四、女性が一・〇三、〇倍である」と報告されている。

「タイプA行動」の概念は、アメリカの心臓病学者M・フリードマンとR・ローゼンマンが一九五九年、高血圧心疾患のリスクファクター(危険因子)として提唱した概念。別冊「タイプAの人の高血圧心疾患の発症率は、そうでない人(タイプB)に比べて、男性が一・四、女性が一・〇三、〇倍である」と報告されている。

「タイプA行動」の概念は、アメリカの心臓病学者M・フリードマンとR・ローゼンマンが一九五九年、高血圧心疾患のリスクファクター(危険因子)として提唱した概念。別冊「タイプAの人の高血圧心疾患の発症率は、そうでない人(タイプB)に比べて、男性が一・四、女性が一・〇三、〇倍である」と報告されている。

「タイプA行動」の概念は、アメリカの心臓病学者M・フリードマンとR・ローゼンマンが一九五九年、高血圧心疾患のリスクファクター(危険因子)として提唱した概念。別冊「タイプAの人の高血圧心疾患の発症率は、そうでない人(タイプB)に比べて、男性が一・四、女性が一・〇三、〇倍である」と報告されている。

過労死—妻が書くカルテ

③

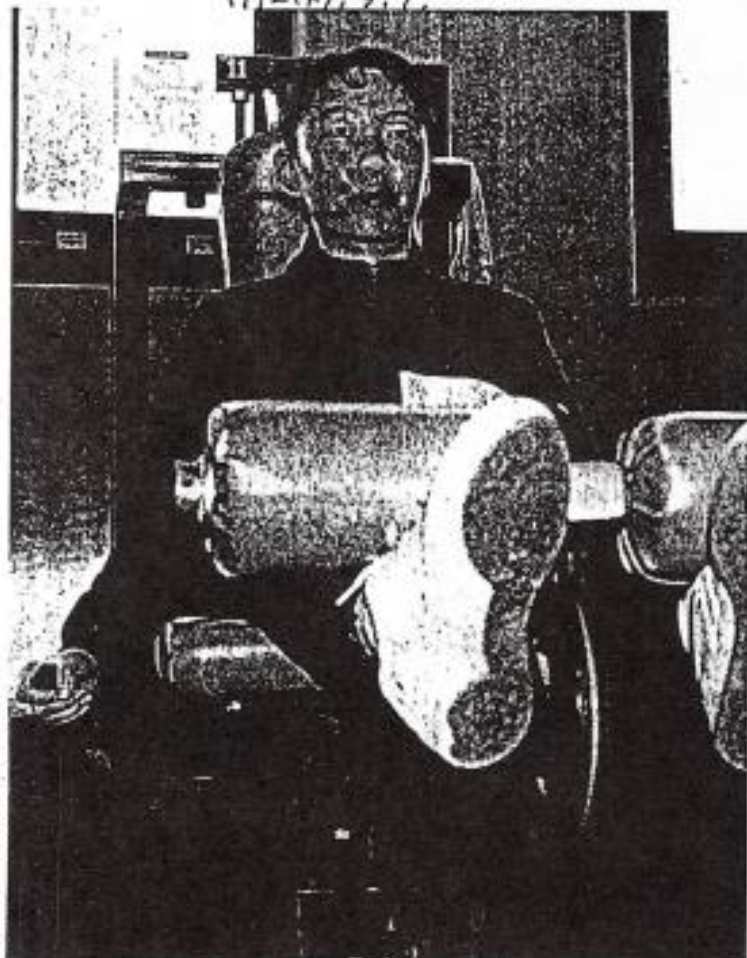
「意識がもうろうとして なったんだ」
 いるのに、病院のベッドで 夕方、捕申した夫のつづ
 「仕事に行く、非道を詰め やきま聞いて驚いた、問い
 る」って驚かすんです。こん 詰めると、細い声で感嘆
 な目に遭ったのに、どうし て仕事のよなんで考え
 のか。私はもう、何だか情 けなくなっちゃって」

一九八二年十月十日午 通信ケーブル管を埋設する
 後、夫の家族が、飯田 作業中、補助パイプ(鋼管)
 市三樓の電話通話ケーブル で頭の右側を突きつけられ
 管理工事現場の細い溝内 るように打ったのだとい
 で倒れた時、市川こちよ う、
 「頭が痛い」と訴える夫



<16>

1992(4), 2, 9



(本文の内容とは関係ありません)

「まさか、こんなにも長 夫の介護、帰って二人の子
 く私たちが家族が苦しめられ 供の世話!」
 るなんて」。夫が倒れてか 懸命に働いた。それでも
 の十年は、一人でも何役も 夫の治療費と家族の生活費
 へ苦しい日々だった。 がお米を買ってあげてとか、
 子供たちは赤十字小学二年 病院で、給食の準備や事務
 生と五年先だった。二人に の仕事も始めた。夫の障害
 「飯を食べさせ、学校に通 者年金を前借りしたりもし
 かりで、お金に困った時、 保険審査会に再審査請求し
 自分の貯金をほたいてまで たが、九〇年二月、やはり
 努力してくれました。子供 棄却された。
 何かに買ってあげてとか、 労災認定をめぐる闘争は
 お米を買ってとか、 やさ 法廷に持ち込まれ、長野地
 しい働きにいつか返返し 方裁判所で審理中だ。」

「確かに夫は以前、高血 圧症でした。しかし、あの
 仕事を始める前の健診で は、正常値に属していたん
 です。なのに血圧が再び上 がり、脳内出血を起して、
 その原因となったのは、頭 を打った時の精神的ショック
 だとしか思えません」
 「こちよは、夜中に突然大 声で叫んだ時の夫が、普通
 の精神状態ではなかった」と を強調する。

後遺症を残した病棟は、 こちよを代理人として、休
 業補償約および障害補償 給付を求め、労災認定請求
 の手続きを取った。しかし、 八四年十二月、請求先の長
 野労働基準監督署長は「不 支給」を通知した。
 理由は「高血圧性脳内出 血は本人の高血圧症が自然
 に悪化したもので、四日前 の頭部打撲は関係なく、業
 務に起因した発症とは認め ません」

ショット92
 鍛える

「奥さんも倒れるのでは？」

りのガイドで天宮川を下ッ に、「休んで病院に行っ
 ていた。
 病院に駆けつけるとこちよ に、医師が告げた夫の病名
 は「高血圧性脳内出血」。 左半身不随の後遺症が残る
 かも知れないと聞いて、ほ 薬を飲ませたり、冷やした
 う然や冷やさずした。
 「それって、あんなに苦しい ところまで、四日前か
 らの出来事が鮮明にいまが えた。」

「王様があつて休めない。
 途中、抜け出して病院に行 くこともできない。仕事が
 大車だ」と言い張る。頭痛 薬を飲ませたり、冷やした
 タオルを巻え
 るようにして
 きたら、
 倒れた日の
 説明、「フア急ない。そ
 こちよは、頭を打ったシ 身不随の後遺症が残った。
 こちよは、就寝中の夫が ヨックで精神的にまいって 第一種二級の身体障害者手
 帳を交付された。」

だが、掛け石 難い」だった。
 に水だった。 この解決を不服して、
 「今度は奥さ 直ちに労働者災害補償保険
 んが倒れるの 審査官に審査請求したが、
 八七年三月、同審査官はほ ぼ同じ理由でこれを棄却。
 裁判の上告に相当する労働 審査官に再審査請求し
 したが、九〇年二月、やはり 棄却された。
 労災認定をめぐる闘争は 法廷に持ち込まれ、長野地
 方裁判所で審理中だ。」

「今日、おれは死んで」 突然叫んだ。びっくりして いる夫を目の当たりにし 帳を交付された。」

(文中敬称略)
 △次回は十四日に掲載し
 ます。

世あわし女探

(17)

1992(4), 3, 14

みか探して、夫は魅力的で、と云うまで、と千恵子は振り返る。
 曲車が狂い始めたのは、その年の秋ころからだ。大型のプレス機は、ますますい騒音と振動を起す。その設備環境の長時間、過労労働が続き、盛の心身は次第にむしばまれ、日に日にやつれてい

過労死—妻が書くカルテ

④

は翌朝の午前三時、三、四時間の仮眠をとって、早朝また出勤。休日も、朝六時又出勤し、帰るのは深夜から未明という生活が続いた。
 「もう、こんな残業からは逃れたい」。仕事に不平等を感ずったどのなかった盛が、千恵子に「おちを」ほすようになった。九月には組合の支部長にも選ばれ、責任と権限は増す一方だった。「支部長がこんな人では、組合はどんな活動ぶりなのだろう」。千恵子

交代制が導入された。が、盛は早番と遅番の両方の仕事の面倒を見ざるを得ず、いっしょに業にはならなかった。
 給与明細書の一月分の残業時間が、百時間を超えるのは当たり前。タイムカードの打刻を操作し、超過分は「妻の口座半当」といふ名目で支払われることもあった。
 「秋ごろから、夫は機械や納期に追われる夢を見て不眠に悩んでいました。夜中に、金縛りにでもあ

え、会社を休めるのに」と云う思った。
 年が明けると、食欲もなくなった。不眠もますますひどくなった。「どうせ飯は食えないから」と、味付けのりを一枚口の中に入れて、はうように出勤したのが、自殺した前日の朝だった。
 「もう、自由に眠ることもできなくなってしまった。それが最後の言葉だった。」

「夫の自殺は、労災認定しかなかった。でも、自殺だから何も書かない、労災認定も無理だろう」と思っていました。でも、それは間違っていたと気づきました。
 千恵子は八九年一月「過労死二〇番」で相談

一九八五年一月十一日早朝、夫の盛(もり)が自死した。同安部郡穂高町の自宅裏の車庫内で、荷造り用ロープで首を吊り、変わり果てた姿を親父が発見した。
 「なぜ自殺なんかな、自殺じゃ、会社に何も書えないじゃないの」。妻の盛千恵子(ちよこ)は心の中で、何度もうそっ叫んだ。夫の死に顔を見た時、悲しみよりも悔



し、死が必死に迫っていた。会社に殺されたと思っただけでも出なかった。

悲劇は、転勤から始まった。岡谷市の精製スチロール工場(現在、本社は塩浜市)に勤務していた盛は八三年六月、同安部郡金村の新設工場に配属された。新工場を軌道に乗せるため、製造部長の下配りとして



(本文の内容とは関係ありません)

自殺—冷淡な会社・労組

早朝から未明まで働いた。「スタート時点は、自分らが新工場を引っ張っていた、という熱意と緊張感

自分のノルマの消化に加え、熟練工が数少ないため、新採用社員の手伝いにも追われた。早朝出勤して、帰宅

は不安が先立った。
 厳しい労働実態が続く中、八四年から試験的に二

たさぐにカタカタ響いてくる。精神のなだたんの前兆だった。千恵子は「いつか五五五で吐いてしま

シヨト 92 鍛える

した非難を浴びた。大町労働基準監督署に労災認定を申請した。夫が自殺したのは、過労労働による慢性疲労と、過労による精神障害が主原因と主張し続けている。

生まれ故郷の飯田市に二人の子供と暮らし、夫の労災認定に向けて、署名集めなどに担當する千恵子。闘いは、まだ始まったばかりだ。

「夫の自殺は、労災認定しかなかった。でも、自殺だから何も書かない、労災認定も無理だろう」と思っていました。でも、それは間違っていたと気づきました。
 千恵子は八九年一月「過労死二〇番」で相談

てから申請に踏み切ったのは、夫の死が個人レベルの問題ではなく、社会問題だといふことが自分と分かるまでに時間がかかったからです」
 労基法違反と知りながら長時間過密労働を黙認していたふしがある会社、積極的にそれを阻止する労組を果たせなかつた労働組合、会社の監督・指導に疑問があつた労働基準監督署。
 「これか一つでも正常に機能していたら、夫は自殺には追い込まれなくて済んだはず」。千恵子は無念でならない。

会社の見解は「自殺は個人的な人間関係の悩みが原因で、仕事には関係ない。年末年始に一週間以上の休みをとっており、過労死でもない」(人事部長)。当時の勤務実績表は、三年の保存期間が切れて焼却処分されており、資料の提出もできない、という。

労組も、労災認定に向けた協力は一切行わない方針の会社と同じ歩調だ。
 「自らの責任を回避するかのよう、みんな自殺の原因を個人的な問題に押し込めようとしている」。千恵子は憤りを隠さない。会社や労組の協力が得られない千恵子を支援しているのは、一部の市民グループだけだ。

(文中敬称略)

女しあわせ探

<18>

1992(4)3,15.

申し入れた示談に反対した。それと同時に労災申請を取り下げた。申請日から二カ月もたつておらず、異例のスピード決着だった。

大手建設会社熊谷組の現場主任だった一が死亡したのは、八九年三月十八日。妻、美園子(40)長野市古野一

ボン、靴下が脱ぎっぱなし。バジャマは着ておらず、すてきな下着シャツの姿だった。市田はきれいにかけたてあり、舌しめもいた様子子がなかった。腹は黒く、倒れるまじりに市田に受け込み、そのまま息絶えした。死んだ。

運命の日、土曜だった。夫は、久しぶりに自宅で休日を過ごすはずだった。その矢先、

「あまりに突然だった。夫の死を、美園子はすぐに受け入れることができなかった。

「眠っている間に心臓が止まるほど疲れていたなんて」。美園子は、過酷な仕事を夫に強いた会社を恨んだ。その一方で、工期に追われ、現場主任として働き続けていた夫の生活の側面を、近くで見てやれなかった自分を悔やんだ。

「もっと早く気づいていれば、何とかなつたかも知れない。要としての配慮が足りなかった。」

「示談が成立したからといって、死んだ夫が帰ってくるわけでもない。すべてが解決したとは思っていません。でも、会社がそれなりの誠意を示してくれなくては、心の整理ができません」

一九九〇年六月末、翌月、美園子(40)長野市古野一は、過労が原因とみられる

過労死—妻が書くカルテ

急性心不全で死んだ夫の時、三十一歳の主婦が、助けてくれた会社

⑤

“労災扱い”でも残る悔い

眠ったまま、再び起き上

三月のはじめ、美園子は工事現場事務所に電話をして聞いた。夜十時過ぎだった。いつものように、もうひと仕事しななくてはならない。今日中に事務所を出れば良い方

「示談が成立したのは、労災認定が得られずに苦しんでいる人たちに比べれば、ある意味では恵まれているかも知れません」

「示談が成立したのは、労災認定が得られずに苦しんでいる人たちに比べれば、ある意味では恵まれているかも知れません」



(本文の文の及等は、原稿を参考にしました)

ショート92

餓える

「眠っている間に心臓が止まるほど疲れていたなんて」。美園子は、過酷な仕事を夫に強いた会社を恨んだ。その一方で、工期に追われ、現場主任として働き続けていた夫の生活の側面を、近くで見てやれなかった自分を悔やんだ。

「あまりに突然だった。夫の死を、美園子はすぐに受け入れることができなかった。

「眠っている間に心臓が止まるほど疲れていたなんて」。美園子は、過酷な仕事を夫に強いた会社を恨んだ。その一方で、工期に追われ、現場主任として働き続けていた夫の生活の側面を、近くで見てやれなかった自分を悔やんだ。

「あまりに突然だった。夫の死を、美園子はすぐに受け入れることができなかった。

「眠っている間に心臓が止まるほど疲れていたなんて」。美園子は、過酷な仕事を夫に強いた会社を恨んだ。その一方で、工期に追われ、現場主任として働き続けていた夫の生活の側面を、近くで見てやれなかった自分を悔やんだ。

「あまりに突然だった。夫の死を、美園子はすぐに受け入れることができなかった。」

「眠っている間に心臓が止まるほど疲れていたなんて」。美園子は、過酷な仕事を夫に強いた会社を恨んだ。その一方で、工期に追われ、現場主任として働き続けていた夫の生活の側面を、近くで見てやれなかった自分を悔やんだ。

世あわし女探

(19)

1992(4). 3. 16.

「公務員認定の審判に」のだった。は、どつてんな時間に「公務とのが分かるのか。因関係係を告ぢわびた揚げ句の果てに定するための「公務」の裁決。賠償や要緊を。あつりハトリに費やした時間とさかし、これ費用の大きき、老後の生活でいゝやうにを貯蓄を、やりきれない思いでいゝは、

英字は、血山は八十八年十月末、脳腫にまで立ち内出血で倒れ、右手足の機入り、発症の能まひと失語症に陥つた原因を「個人の病久男が上田東高校の問題」とし教諭の公災申請に対して片付けよとする審査委金庫支部が下した公務外、勢に憤りを隨の裁決に不満でなない、さな、

公務員申請の手続きをとつたのは、同年十一月、倒れた日、結果が通知されたのは九〇、病久男は六時年九月だった。裁決理由は「目の担当する「発症前に特に過激な公務する生物の授業は認められず、発症は本人を終えた後、のする高血圧症によるも引き続きして生

過労死一妻が書くカルテ



(本文の内容とは関係ありません)

健の方を事件に関する生能常になり、ハンドル操作がっなら夫がうすくまてい指導委員会に学年主任に覺つてなつた。七時、て、その後は夢中でした。出陣。その後、野球部後、自宅になんとかたどり着い、すくに救急車で病院に運、精密検査の結果は、奇付金集めなどに追われ整理を行い、六時半、又も、助けになつた。やうと立「脳内の左被出血」だつち上がつて玄関に入つた。

体は愛別を産したの、が、その場で意識を失つた、仕事が多忙になつたの、夜中の一時、又もまて仕事をする日々が続いた。

膨大な書類整理のため、二学期になつても、礼状の発送など後援会の職務整理は続いた。創立百周年記念事業の準備も加わつた、そして、生徒の車両万引事件の発生、学年主任として責任を問われ、精神的に

後遺症残し、老後に不安

中だった、してびつりしました。部は、野球部の夏の甲子園出選中、右手の感覚が異、風から出て、玄関に駆け寄、過が決まつてからだった。

「もともと高血圧でしたので、心配はしていません、でも、母校の名譽のために頑張っている夫に、休め」とほ言ひ出せませんでした。

「いいえ、き・く・お」

「い・く、お」

「ペン、はぎ、くし」

簡単な単語すら忘れていた。英字は、繰り返して、繰り返して教えた、夫は必死になつてきた、言語障害は、驚くべきスピードで回復していった。

英字の祈りが通じたのか、右手足の機能まひも回復が速かつた。車いすを使わなくても出歩けるようになった。右手も、鉛筆やチヨークを持つて字が書けるまでになった。

そして、倒れてから二年とたたない八九年八月、職場復帰を果たした。

「高齢だから回復も遅く、もう仕事は無理かも知れない、と思つてました」

英字は、奇跡的なスピードの機能回復を素直に喜んでゐる。だが、病久男に限らず、職場での責任が重くなる一方で、成人病の恐れが及び寄る中高年齢者、「だから、仕事はほとんど、とは本人はもろもろ、開りのものだから、病久男のことではないよな気がするのですが」と前り切れない思いをもちます。

病久男は今年、定年を迎える。二人の子供のうち、娘は既に嫁ぎ、息子は研究者の道に進み都会暮らしだ。「脳障害の後遺症を煩す夫と二人で、老後をどう迎えればいいのか、英字の不安は募るばかりだ。」

ショット'92
鍛える

生物の授業以外にも、学級担任、学年主任、教科代表、クラブ顧問などを兼任していた病久男は、いくつもの仕事を背負ひ込み、夏休みもほとんど保めず、英字に「破れた」を連発するやうになった。

「名前」

「文中敬称略」

生物の授業以外にも、学級担任、学年主任、教科代表、クラブ顧問などを兼任していた病久男は、いくつもの仕事を背負ひ込み、夏休みもほとんど保めず、英字に「破れた」を連発するやうになった。

「名前」

「文中敬称略」

「転職して本当によかった。やっと人間らしい暮らしができるようになった。家族と一緒に過ごす時間も増えて、子供たちも大きいです」

坂口節子(仮)は長野市福野町に、傍らに産多夫の茂美(仮)の顔に視線を向け、胸をなで下ろすように語り始めた。

女しあわせ探し

<20>

1992(4), 3.17.

過労死—妻が書くカルテ

「二時、三時にすれ込む通じやないな」と茂美は感

中(二時、三時にすれ込む通じやないな)と茂美は感

「サラリーマンをやってみたことも多かった。サラリーマンに中途入社した。『サラリーマンという人種』は、こんなに働かされたりでも妻にはそう言わざるを得なかった。節子は次第に心配になった。『こんなもんだろ、忙し分狂わない技術と精神の塊』

心身の疲労は、胃痛から始まった。仕事をしているとき、キリキリと刺すように胃が痛み、食事ものをとることもなくなった。井田をほとんど預けて帰る夫に、「仕事を休んだら」と何度も促した。『仕事が大それたと言いつつ、節子はよくよく』

「原因かも」と医師はいるんじゃないかと、部分心配しました。節子の心配は募るばかりだった。生々しい茂美は、胃痛や頭痛に悩まながらも、仕事は消化し続けた。平日の仕事もできるだけ少なくしようと、休日も出勤した。節子さえも職場に引張りだして手伝わせ、フルタイムを断念した。

「なにか上手に言いくるめちゃったらしいよ」。茂美は、節子にそう告げた。『もう、やめなさいよ』

「もうだ」再び転職を考えた。大工の経験を生かして建設会社に転職したのは、茂美が四十歳の時だった。

「今思うと、胃痛や頭痛を夫が断えた時、無理にでも医者に行かされたのがよかったと思います。精神的にまいった時、一週間ほど静養させたことも、あのまま、放置していたら、自殺しかねなかった」と節子。

世間や会社に気がねすることなく、夫を休ませた節子。それが、過労死を未然に防ぐ大きな力になった。節子は言う。「本人の『休む勇気』と、身近にいる家族の『休ませる努力』が大切な気がします。休みは、労働者の権利なんですから」と。

(文中敬称略)
(過労死—妻が書くカルテの項、おわり)



(本文の内容とは関係ありません)

ショット92

鍛える

「表情が固くなり、笑顔を失った茂美は、カメラが似合うようになり、レンズの加工や研磨、コーティングの作業に追いつかれて暗い作業をこなすようになった。今はもうそのようです」

過労で倒れて、後遺症を残り、死に近づいたままが誕生した。『父親としてでも、長時間・過密労働にのめり込んでいた茂美は、強苦しみ、慢性的なストレスに悩んでいる人は数多い。』

早朝六時に出勤し、帰る茂美も、ぞつとした。過労死予備群の一人だった。

家庭

人生の転機は、二十九歳の時だった。建築職人だった茂美は、自分も一度、サ

しいのは大工も同じだよ。中を必要とする。長時間の病院に行かされた。従業員の半分近くを、神経を張り詰めた仕事は、トタイマーが占め、中途退知らず知らずうちに心身も職者も多いこの会社を、普をもしばんでいった。

休む「勇気」と「努力」こそ…

に、突然仕事の腫にならち残業手当が削られて、手取りは逆に減った。『節子だけの役職でした。』

過労死—妻が書くカルテに反響

連載企画「女しあわせ探し」
 過労死—妻が書くカルテ
 (家庭面)三月七日付から「回復」に、過労死予備群の夫を捉える妻や、企業戦士の末路を憂う予備群が、多くの反響があった。「ゆとり」や「時短」が叫ばれながらも、いまだに長時間・過密労働を強いられ、人間としての

非協力的な会社や労組に憤慨

「この世の中、働きバチが美化されて、その中で負けてしまう一隅の人間はクズ扱いされるのが、社会の



1992(4)2, 24,



生命さえも、機械部品のように使い捨てられる。ねない生産効率優先の産業社会。そのひずみが、過労死を生む。(長野市内の通勤風景)

方に暮れている人間もいるのです。」

労災申請についての、会社や労組の非協力的な態度に憤慨する声も多かった。中債地方の主婦は「脳内出血で身障者となった夫

昨年六月、夫の公務災害認定の通知を受け取り、少しだけ静かな日々が訪れました。マラソンランナーのよきに走り続けてきた私ですが、それまで気づけなかった自然の移り変わりにも心が動くようになりまし

山岡京子会長の手記

予備群、のなんと多いことか

「自分の夫の申請のことが頭になかった私ですが、『過労死を考える家族の会』の会長を務めることになり、改めて周囲を見直すと驚くことばかりです。労災や公災の申請をしている人はもちろん、また裏面に出ているけれども、過労死予備群、ともいってべき人

に動いてきた仲間の不幸な事故を前にして、職場がまず協力して問題提起する」とが必要でしょう。この点、私の場合は本当に幸運でした。

また、非障士会や各機関の相談窓口などの良い助言者を得ると、これも大切ですが、不承にしてその渦中に追いやられた遺族は、何をどうして良いやら、見当さえつかないものです。そんな時、適切な助言と指導をしてくれる人がいれば、これほど心強いことはありません。

そして、やはりこれ以上、働き過ぎが原因で命を失う人が出ないように、長時間・過密労働をなくすように、運動して行かなければならぬと痛感しています。

「元氣な時は生産効率アップのためにフル回転させ、倒れたり病気になるれば、雇われ分、そんな世の中が、過労死を招いたに違いない。」

転職不利な社会が温床に

「ロボットが働いていた」

「ロボットが働いていた」
 出の人たちが会社の机に向かうと、一方では、肉と骨が離れ、組合に相談した

「ロボットが働いていた」
 出の人たちが会社の机に向かうと、一方では、肉と骨が離れ、組合に相談した

家庭

「ロボットが働いていた」

出の人たちが会社の机に向かうと、一方では、肉と骨が離れ、組合に相談した

「ロボットが働いていた」

「ロボットが働いていた」